

ミュンヘンの文学散歩 (7)

佐野晴夫

49. トーマス・マンの旧居のひとつ (Ungerer Straße 24)

ミュンヒナー・フライハイトでレオポルト街から北東へ二股に分かれたウンゲラー街の、すでに言及したケストナーの住んだフックス街への入り口とは反対側（東側）の建物にトーマス・マンの旧居のひとつがあった。

この事実より、ウンゲラー街に面した「北墓地」こそ、ギリシャ神話を下敷きにして、ヘルメス神やナルチス像がちりばめられた名作「ヴェニスに死す」(1912)の冒頭の舞台になった事情もうなずけるであろう。筆者は、当初、シュワーピングの中心地にある「旧北部墓地」にそのよすがをさがしたけれども、小説の描写にふさわしくなく、Th.マンが後年移り住んだ折、散策の途中に立ち寄った新しい「北墓地」が選びとられていることに気付いた。

今世紀のミュンヘンの文学と文化を論じようとする者は、どうしてもトーマス・マンの存在を抜きにしては、語る事が出来ない。北独リューベック生まれのトーマス・マン(1885-1955)が一年志願兵資格証明書を得てカタリーネウム実科高等学校を卒業し、父親の死後、長男ハインリッヒはサナトリウムで結核療養につとめなければならなかったため、すでに母親がユーリア、カルラ、ヴィクトールの子供を連れて移り住んでいたミュンヘンへ1年遅れで合流したのは、1894年3月のことであった。その場所は「旧北部墓地」に近いラムベルク街2番であった。

50. マン一家移住の最初の住居 (Rambergstraße 2)

若いTh.マンがもっぱら住んだシュワーピングの住まいの北端がウンゲラー街であるとするならば、彼の移住した南独の首都の最初の住宅の場所は、19世紀前半では街区の「北端」を意味したNorendstraßeに間近く、また「選帝公」を表すクアヒュルステン街と交わる街角に建つ住まいで、ここからはミュンヘン美術学校が指呼の間にあった。多分、長兄ハインリッヒ・マン(1871-1950)等の便宜を斟酌して、この街区が選ばれたものと考えられる。

ところで、この大都市へやってきた翌月、Th.マンはシュワーピングの入

り口であるオデオン広場にあった「南独火災保険会社」の無給の見習い社員となった。その支配人が以前リュベックで父親と親しかった仲であった関係からである。だが、仕事の合間に、こっそりと処女小説『転落』を執筆し、M. G.コンラートが主宰する社会主義的自然主義の機関雑誌「社会」に発表され、好評であった。1年後退職し、兄ハインリッヒのあとを追ってイタリアへ旅立つまで、ジャーナリストになろうとして、ミュンヘン大学前の「国立図書館」で勉強したり、ミュンヘン工科大学の聴講生となり、マックス・ハウスホーファー教授の「国民経済学」、フェーリクス・シュティーヴェ教授の「文化と世界史」、ヴィルヘルム・ヘルツ教授の「ドイツ神話学」、フランツ・フォン・レーバー教授の「美学原論」、カルル・フォン・ラインアルトシュエットナー教授の「シェイクスピアの悲劇」を受講した。1895年の夏学期には、ミュンヘン工科大学でフランツ・フォン・レーバー教授の「芸術史（カール大帝以降のドイツ建築）」、フェーリクス・シュティーヴェ教授の「19世紀ドイツ史」、ヴィルヘルム・ヘルツ教授の「中世ドイツ文学」を聴講した。

また大学演劇協会を通じて詩人のオットー・エーリッヒ・ハルトレーベン、オスカー・パニッツァ、ユーリウス・シャウムベルガー、ルートヴィッヒ・シャルフ、ハインリッヒ・フォン・レーダー、後年の政治家エーリッヒ・コッホ＝ヴェーザー等と交流し、同年6月15日、イプセンの『野鴨』をドイツで初演した際、エルンスト・フォン・ヴォルツォーゲンがエークダル老人の役を、ハンス・オルデンがヤルマルを、トーマス・マン自身も卸商人ヴェルレを演じたりした。

同年7月から10月にかけて、兄ハインリッヒとローマと近郊のパレストリーナへとイタリア旅行旅行へ出かけたが、ミュンヘンに戻ると、兄とともに雑誌「20世紀、ドイツの様式と安寧のための定期刊行物」へ寄稿し、その編集に協力した。1896年には短編小説「幸福への意志」を完成させた。

ここで、改めて、ミュンヘンにおけるトーマス・マンとその一族の居住した建物やゆかりの場所をまとめ、列挙してみよう。

- 1894.3 — ラムベルク街2番
- 1898.5 — テレージエン街82番1階右（最初の独身者寮、短期間）
- 1898 — バーラー街69番1階
- 1898.11 — マルクト街5-3番（短編小説『衣装戸棚』の舞台）
- 1899.6 — ファイリツチュ街5番3階（クレーの隣家）

- 1902.1 - ウンゲラー街24番
- 1902.9 - ペンション「ギーゼラ荘」 (短期滞在)
- 1902.11 - コンラート街11番
 アインミラー街31番3階
 フランツ・ヨーゼフ街4番
- 1905.2 - フランツ・ヨーゼフ街2-3番 (1905年2月11日にカトヤ・
 プリングスハイムと結婚し、スイスへ新婚旅行のあとの新居)
- 1910.10 - マウアーキルヒャー街13番 (ヘルツォーク公園そば)
- 1913.2 - ボーゲンハウゼン地区ポッシング街1番の敷地をカトヤ・マン
 名義で購入
- 1914.1 - ポッシング街1番の新居へ入居

余談ながら、1908年9月、バート・テルツにミュンヘンの建築家ガーブリエル・フォン・ザイエル設計で夏をすごす別荘を建設した。1917年8月にヴィリ・ヴィーガント博士に売却され、しばらくプレーメン通信の事務局として利用されていたが、現在では、カトリック尼僧の施設として使用されている。

51. 原田直次郎の通った美術学校 (Akademie der Bildenden Künste, Akademiestraße 2)

すでに原田直次郎 (1863-1899) については、ホイ街に下宿していた時代の鷗外森林太郎 (文久3-大11) との関係から述べたが⁽⁴⁴⁾、『独逸日記』を通じて、彼は一時期美術学校前のアカデミー街に住んでいたことが分かる。ここでは、鷗外が日本へ帰国後、SSS社同人 (市村讚次郎、落合直文、井上通泰、小金井喜美子等) の協力のもとに著した『国民之友』第58号夏期付録 (明22.8.2) に掲載された訳詩集「於母影」との関係から言及してみよう。笠女郎が大伴家持へ贈った3首中のひとつ「陸奥のまの、かや原とほけれどもおもかげにして見ゆとふものを」(『万葉集』巻3・396番) に由来するアンソロジーの口絵の作者こそミュンヘン留学時代の親友にして洋画家であった原田直次郎であった。口絵の意匠は、泰西の文化と芸術を理解させ、日本へ同化と定着を意図しながらも、明治15年に発表された『新体詩抄』の蕪雑で美感に欠ける訳業に飽きたりない鷗外の意気込みを反映するかの様に描く。画面に3人の子供が描かれており、前面の子供は三味線を持ち、背面の子供はヴァイオリンを弾いている。2人の間に譜面に譜面台、さらに和洋の楽器である琴、琵琶、横笛、鼓、そして豎琴とチェロがおかれている。中央に位置する子供は舞扇の後方より楽譜を

手にして唱っているが、覇気に満ちた青年期の鷗外の面影をたたえている。この画面からも、原詩の形式にとらわれない「意訳」、原詩の音節数に対応する音数律を使用して訳す「句訳」、原詩の脚韻に注目して邦語でも同音または同文字で移そうとする「韻訳」、泰西詩にも平仄があると考えた観点からの「調訳」という4種類の訳詩方法の実験を試みた鷗外の文学的意図を理解し、原田直次郎はヴァイオリンと三味線に代表される西洋と日本の調べの複合する中で、新奇の外形美ばかりではなく、従来、日本になかった抑えがたいノスタルジーの情感や異郷趣味、恋愛や生死にかかわるロマンチックな諸相、生の憧れや苦悶を彩る厭世的感情が導入され、同時代および後代の人々へ強烈に深くまた長く影響を及ぼすことを予感させた。

鷗外の留学時代の私生活のうち、ベルリン期の一端を写しだしたのが『舞姫』(明23.1)だとすれば、ミュンヘン期のそれは『うたかたの記』(明23.8)である。その冒頭で凱旋門の西に設置されたミュンヘン美術学校周辺の描写を行っている。

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリアの像は、先王ルウド井ヒ第1世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウド井ヒ町を左に折れたる処に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術学校なり。校長ピロツチイが名は、をちこちに鳴りひゞきて、独逸の國々はいふもさらなり新希臘、伊太利、瓊馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫工数を知らず。日課を畢へて後は、学校の向ひなる、「カフエエ・ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどして、おもひおもひの戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさゞめく声聞ゆるをり、かどにきかかゝりたる2人あり。⁽⁴⁵⁾

この学校は1874年から1884年にかけてG.ノイロイターによって建設されたが、第2次世界大戦中被害をうけたため、現在は簡素な寄せ棟様式で再建されたものである。ところで、この短編小説で、日本からミュンヘン大学へは時折入学する者がいるけれども、美術学校へは巨勢が初めてであると紹介されているところを見ると、この地の美術学校へやって来た最初の邦人が原田直次郎になる。鷗外は、序文の中で「篇中人物の口にせる美術談と共に、いと釋き昨なり。多く資料を供せし友人主は、谷中墓地の苔の下に眠れり」⁽⁴⁶⁾と語るとき、この小説中で美術学校内のアトリエや中庭の風景を描写するとき、友を訪れた折に、直接目撃した情景を偲び、また昔日友より説明された芸術談話を想起しながら、

原田直次郎がモデルであることを告白している。作者は1886年6月13日夕刻7時にスタルンベルヒ湖で溺死したバウリア王ルウド井ヒの実話エピソードを、フィクションで、日本人青年画工と連れだって遊びに来た漁師ハンスルの娘の水死と関連付けてより合わせながら、対比的に描いたものである。

52. 文学カフェ「ミネルワ」(Akademiestraße)

また現在存在しないけれども、学校前には文学サロンとしても名高く、芸術家の卵が出入りするカフェ「ミネルワ」があった。「大理石の圓卓幾つかあるに、白布掛けたるは、夕餉りたる迹をまだかたづけざるならむ。裸なる卓に倚れる客の前に据ゑたる土やきの盃あり。盃は圓筒形にて、爛徳利四つ五つも併せたる大きなるに、弓なりのとり手つけて、金蓋を蝶番に作りて覆ひたり。客なき卓に珈琲碗置いたるを見れば、みな倒に伏せて、絲底の上に砂糖、幾塊か盛れる小皿載せたるもをかし」⁽⁴⁷⁾ という風に、テーブル上の描写から、客の服装や振る舞い、店内での客の会話、ウエートレスの態度、物売りの少女の挿話が6頁にわたって詳述されている。この様な描写が可能になったのは原田直次郎の愛人マリー・フーバーがこの店で働いており、友と一緒に鷗外も足しげく来店していたからである。また『うたかたの記』の少女マリイの名称が原田の恋人に由来する様に、鷗外の『独逸日記』の記事を見れば、原田やマリーと共に出かけたスタルンベルヒ湖への遠出の思い出も小説へ織り込まれることになったことが確認できる。⁽⁴⁸⁾

カフェは9世紀頃オリエントにはじまり、17世紀中葉ヨーロッパに伝播した。1684年にはリュ・ド・フォセ＝サン＝ジェルマンに文学カフェが出現し、またドイツ語文化圏でも先ずフランクフルト・アム・マインやヴィーンに生まれ、やがてミュンヘンでも庶民階級のサロンとして、さらにボヘミアン芸術家のたまり場として発展していった。鷗外の小説中に別の店名「ロリアン」も挙げられているが、「シュテファニー」(アマリエン街14番)「パウアー」(アマリエン街とテレージェン街との街角に位置し、1913年に「グラーゼル」と改称)「ファアリヒ」(ノイハウザー街40番)が著名であった。しかし、20世紀後半には、政治カフェと同様に、文学カフェの概念も存在も死滅してしまっている。

53. エーリッヒ・ミュルザームの巢穴 (Akademiestraße 9)

「グレーゼンヴァーン (誇大妄想)」の異名をもつカフェ「シュテファニー」でも髭面に鼻眼鏡をかけ、革命家然としたエーリッヒ・ミュルザームの風貌は、

ポヘミアンの群れに混じっていても異様な印象を与えた。大小2室のヴィーン風造作からなる小部屋窓際のチェス盤にむかうことが多く、また意外に文学青年達にとりまかれて議論をかわし、疲れ果てたとき、やっとアカデミー街の家へひきあげて行った。彼はベルリンから南下したあと、この地で「カイン誌」を発行したりしたが、戦前のシュワーピングの生活に寄せる頌歌を非政治的な回想『名前と人間』は盛り込んでいる。また彼は1918年の革命家であり、バイエルン・レーテ共和国の中央委員会の構成員の一人であった。

またゲオルゲ街 105番にもミューザームは住んだことがある。

54. アカデミー街15番のプレヒトの旧居 (Akademiestraße 15)

ミューザームと同じくカフェ「シュテファニー」党であり、しかも同様に、美術学校前に住んだ人物として、劇作家バルトルト・プレヒト (1898-1956) がいる。アウグスブルクに生まれたプレヒトはミュンヘン大学で医学を学び、さらに卒業後も同地で活動した。この住宅は1920年母親が死んだあと居を定めたとところで、ここで1921年は一幕物『婚礼』等を書いたが、やっと1922年ミュンヒナー・カンマー・シュピーレ (小劇場) で『夜の太鼓』の初演に成功をおさめ、1923年3月に娘ハンネ・マリアンネが誕生し、5月には『都会のジャングル』をレジデンツテアター (宮殿付属劇場) で初演し、またミュンヒナー・カンマー・シュピーレの文芸部員になることができ、好運のきざしに恵まれた場所であった。だが、ヒトラー暴動の際、彼の名前がリオン・フォイヒトヴァンガーと共に逮捕予定者リストにあたりしたためでもないが、翌年、彼はベルリンへ移住した。この他に、書簡の発信地の記録からミュンヘンでプレヒトが住んだことのある住宅として判明しているものに、次の場所がある。

1917.10頃 マクシミリアン街43 3階

1917.11頃 アーダルベルト街12 1階

1918. 5頃 カウルバッハ街63A 2階

1920. 1頃 パウル・ハイゼ街9 4階

23歳も年若い後輩であるのにもかかわらず、この時期の彼は、同一都市で、イーザル河の対岸のお屋敷町に住むトーマス・マンが、20歳にして発表した長編小説『ブッデンブローク家の人々』(1901)でもって文壇の寵児となり、市民貴族的な雰囲気の中で生活しているのを見聞し、反発していた。

しかし、1933年抽象的な言辞であったが、Th.マンが社会主義に組みする態度を表明し、そのアピールがナチスによって禁じられていた「自由のことば」

文化会議で紹介され、2月22日の「フランクフルト新聞」等で報じられたことから、いさぎよくブレヒトは賛意と激励の書簡をルガーノの地から3月中旬に送り、Th.マンの人物評を改めている。

拝啓

あえてお伝えしたいのですが、かくも危機的な時点にあなたがドイツ労働者階級にくみする立場をとられたことは、私がベルリン、プラハ、ヴィーン、およびチューリヒで知り合った友人たちから大きな、誠実な敬意をもってむかえられています。このことをあなたにお伝えするのはドイツ文学の面目を守るあなたの声明が周知のようにおびただしい敵意を、もしかすると一身上の危険をも、あなたにもたらしているからであり、また、進歩的市民層がすっかり臆病になっている現状ではわれわれの民衆の大多数である被抑圧部分にくみするあなたの態度決定の作用について、あなたは知る機会をあまり持たれない、と推察されるからである。⁽⁴⁹⁾

55. カンディンスキーの旧居 (Friedrich Straße 1)

モスコワに生まれたワシリ・カンディンスキー (1866-1944) は、1896年画家になろうとしてミュンヘンへやって来た。ユーゲントシュティール、ジャポニズム等の影響を受けたのち、1910年に最初の抽象画を描いた。この年に、「青騎士」の会が組織された。翌年、注目すべき著書『芸術における精神的なものについて』を発表しているが、さらに1913年には『追想録』や詩集『響き』までも公刊した。「1908年から1914年にかけての歲月、ミュンヘンは、その創造的な力によって、世界的な、ますます増大する影響を及ぼす精神的にして芸術的な運動を体験しました。青騎士の会はミュンヘンの大地から、この都市の文化的風土から生まれたものです⁽⁵⁰⁾」と、美術史家ルートヴィヒ・グローテが語ったことは、ミュンヘン、とりわけシュワービングの空気に触れたことのある者達にとって、あながち誇張ではない。そのシュワービングのフリードリッヒ街1番に今世紀初頭に最も注目された芸術家カンディンスキーの旧居があった。

なお、すぐ近く、美術学校の背後(北側)にあたるゲオルゲ街16aにアトリエ・ハウスに改築された建物があった。古びた庭園内に削られないままの丸太を組み立てたロシア農家風のログハウスで、大きな窓が北側へ向いていた。かつてはカンディンスキーも学んだ画派「アツベ」があった。

未完

1996. 4. 22

注

- (44) 拙稿「ミュンヘンの文学散歩(1)」1990、山口大学「独仏文学」第12号
S.106f. S.120.
- (45) 森林太郎『水沫集』明25.7、大5.8縮字印刷、⁵大7.7、春陽堂 S.1f.
- (46) ibid. 序 S.2.
- (47) ibid. 「うたかたの記(上)」 S.3.
- (48) 『独逸日記』(森林太郎「鷗外全集」全35巻<昭50.1、岩波書店>所収)
S.148.
- (49) ベルトルト・ブレヒト著、野村修訳『ブレヒト全書簡』1986.12、晶文
社 S.137.
- (50) Ludwig Grote: Der Blaue Richter. Im Katalog der Ausstellung
Der Blaue Richter 《, die 1949 im Münchner》 Haus der Kunst 《
stattfand.